

出版史から見た明治時代の「誌友交際」

報告者: 長尾 宗典 (城西国際大学 m-nagao@jiu.ac.jp)

はじめに

i) なぜ出版史か

- 文学部史学科系の思想史研究…思想の形成—発表—流通—保存—→ (再生)
- テキスト (text) とコンテキスト (con-text)
- 図書館勤務の経験から得た視点
- End user (読者、図書館利用者) を歴史の舞台に登場させる cf. 民衆史、地方史
- 思想を生み出す出版の「現場」と「学」の架橋 → 出版学会

ii) 「誌友交際」の視点

- 「誌友交際」とは? …投書雑誌によって育まれた少年たちのコミュニケーション
明治 30 年代に各地で独自の展開
- 「あの頃流行した、紙上を通しての誌友交際といふものを自分も人並みに試みたことを思ひ出す」(吉野作造「少年時代の追憶」1926 年) ※強調は引用者
- 文学研究における地方雑誌の発掘 (木戸、2019・林、2021 ほか)
- 出版研究、出版史料としての地方雑誌

1. 「誌友」はいつからいるのか、そして、どうやって「誌友」を作るのか?

- 日清戦争後 (1895~) の当初雑誌の隆盛。背景としての中学校令改正 (1899)
- 雑誌『文庫』の記者読者懇談会→誌友会に発展

表 1 雑誌『文庫』地方誌友会の開催記録(1900~1902)

	日時	地域	会場	参加者	『文庫』掲載号
1	1900.6.23	金沢	兼六園環翠亭	14	15(4)
2	1900.9.30	岡山	東山三勲祠畔	8	16(2)
3	1900.11.3	名古屋	東海青年文学会談話室	37	16(3),16(5)
4	1901.1.20	高山	高山公園保壽寺	13	17(1)
5	1901.4.3	名古屋	不二見町可愛軒	42	17(4)
6	1901.4.3	高岡	(会場不明)	14	17(4)
7	1901.4.21	静岡	流井園	11	17(5)
8	1901.5.25	金山	金山文庫	2	17(6)
9	1901.6.9	一関	沈水亭	15	18(1)
10	1901.6.16	辻川	榭屋	21	18(1)
11	1901.7.23	京都	清水寺畔松岡屋	8	18(2)
12	1901.9.21	静岡	流井園	17	18(6)
13	1901.10.20	山田	大林寺	13	19(1)
14	1901.11.10	長崎	一茶亭	17	19(2)
15	1902.1.30	長崎	螢茶屋	31	19(6)
16	1902.1.?	盛岡	多賀水月亭	35	20(1)
17	1902.4.20	静岡	徳願寺	9	20(4)
18	1902.6.8	山田	二軒茶屋	13	20(5)
19	1902.10.26	長崎	天草島	11	22(1)
20	1902.11.9	山田	対岳楼	19	22(2)

- 「誌友」の作り方、文通の作法

【史料①】木村小舟『足跡』(1930年、桐花会出版部)32~33頁。

さて自分の書いた文章が、相ついで二三の雑誌に掲載されると、又実に不思議なもので、彼方からも此方からも、未見の人々が文通して来る。投書家にとっては、之が絶大の趣味でもあり、名誉でもある。そこで此方からも、此の人と思ふ所へ向けて交際を求めてやる。其また文意が殆ど皆同じで、『未だ馨咳に不接候へ共、御芳名は某誌上に於て拝承致し敬慕罷在候』とか『永遠に水魚の交を賜らんことを』とか、殆ど之が定り文句であつたが、併し大概は一年か二年で、其文通が杜絶してしまふから滑稽だ。私の如きも多い時には二十余人の誌友を有つてみた。九州、中国、近畿、四国、関東々北と殆ど各地方を網羅して、三日にあげず書信の往復をするので、其忙しさは並大抵でなく、其費用もなかなか馬鹿に出来ない。そして或は写真の交換、新聞紙のやりとり、延いては互に誌友を紹介し合ふなど、少くとも毎日五六本の手紙を認めねばならぬ。

- 名古屋の雑誌『文壇』とその支部制度
- みんなで本を出そう！ …印刷地は何故か岐阜（西濃地域）

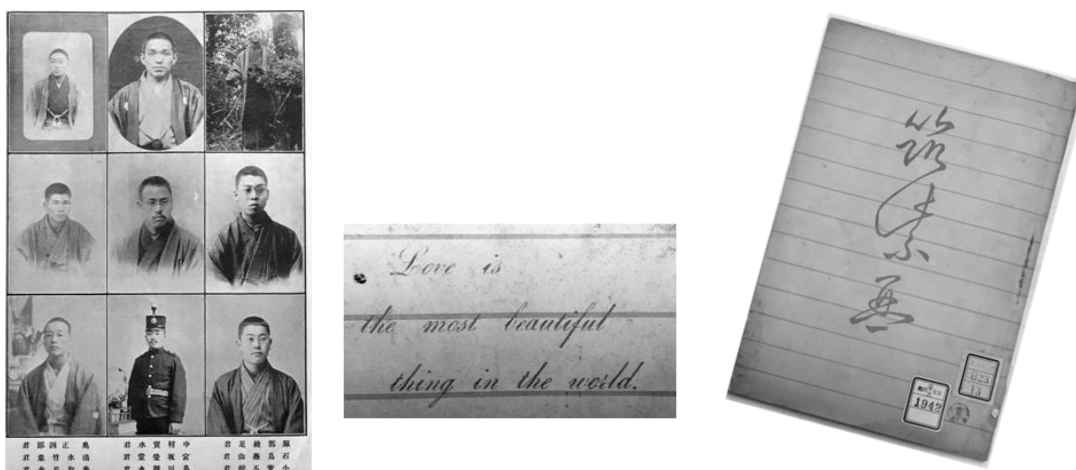


図1 『筑紫紫』表紙・口絵・裏表紙(九州大学所蔵)

- 大雑誌展示会の試み

【史料②】「会員諸君に望む」『桜州青年』第5号(1899年10月)、前付二頁。

◎別項広告の如く、十月二十二日を期して会員大会を開くべきに付ては出席諸君の閲覧に供せんが為め会場内に雑誌閲覧場を設け度く、是等の事は地方雑誌会の景況を知り又他に益する所も少からずと存じ候に付汎く全国の会員諸君より御寄贈を忝ふし度候。

一、政治、文学、実業、の何種たるを論ぜず

一、最近発刊の分を望むとはいへ、既に廃刊したるものにてても苦しからず、又数年以前の発刊にかかれるものにててもよろし

一、可成種類を多く聚め度候に付、同じ題号のもの数部よりは、異りたるもの、数多きを望み候

一、全国中に於ける雑誌の種類を普く聚め度き心組に付き地方の会員諸君は幸にして御尽力を給はり度候(中略)

◎土地遠隔の為め御出席出来がたき諸君は、可相成は写真一枚宛御送付相願度、大会々場へ

陳べ可申候、さすれば親しく膝を交へて相語るの感も有之、大に懇親の一助と相成申すべきかと存候。

- 自主雑誌制作までやるのは男子中学生（程度）中心の流行？ Cf.女子の投書文化

2. 地方の文学青年たち

表2 地方文士のプロフィール ※小木曾『地方文芸史』登場人物を中心に

氏名（生没年）	略歴
古田耕雲（1871-1941）	岐阜出身。英義学館など漢学塾で教鞭を執る。名古屋の雑誌『文壇』の主筆。
上村雲外（1877-1932） 	熊本の人。旧姓近藤。明治32年（1899）、熊本師範学校を出て教員。各地の雑誌に精力的に寄稿した。地方文人の投稿を集めた『筑紫琴』などの作品集も発行する。 ※写真は小木曾『地方文芸史』改定版による。
木村小舟（1881-1954）	岐阜出身。教員を務めたのち、博文館に入り、少年雑誌の編集者となって投書を数多く取り上げた。
小木曾旭晃（1882-1973） 	岐阜出身。本名周二（のち修二と改む）。明治27年、不慮の事故により全聾となり、学校中退。以後、投稿に熱中。『山鳩』他多くの雑誌を主宰した。明治42年、岐阜の西濃印刷株式会社入社。教育新聞を創刊。著書に『地方文芸史』。大正期に岐阜通俗図書館を経営。のち岐阜日日新聞社編輯局長。 ※写真は明治40年のもの（『旭晃偲び草』より）
河野紫雲（1882-1963）	埼玉出身。本名省三。『中学世界』などに投稿。神道学者。國學院大學学長。改定版の小木曾『地方文芸史』に序文を寄せる。
入沢涼月（1884-1951）	岡山出身。中学在学中、有本芳水らと血汐会を結成し、『血汐』『白虹』を発行。「越中中国文壇に無くてかなわぬ男」
畔上賢造（1884-1938）	長野出身。上田中学在学中に、雑誌『少年文友』や成澤玲川が発行する『信州文壇』などの雑誌に投稿した。内村鑑三に師事し、後に無教会派の伝道者となる。
石島薇山（1885-1941） 	埼玉出身。本名郁太郎。田山花袋『田舎教師』に登場。上村雲外とともに、「地方文壇の元勳」と評される。行田の鴛鴦文学会発起人。理想団忍支部結成にも参加し、『忍商報』でも評論活動を行なった。のち埼玉県の郷土史家として活躍。 ※写真は『筑紫琴』（1903年発行）による。
木村毅（1894-1979）	岡山出身。文学評論家。明治文化史研究者。『少年世界』などに投稿していた。

- お金の話…1号にいくらくらいかかったのか？
- 岐阜・^{こぎぎ}小木曾旭晃『地方文芸史』の史料的价值
→第二次大戦後の小木曾の活動（林、2021）
- 上田中学生と『信州文壇』
→地方中規模都市（中学校設置地域）における書店の機能（出版と販売）
- 岡山発行『白虹』の事例から
→関西中学の入澤涼月と有本芳水（実業之日本社）
明星系文芸誌、読者拡大戦略→発行難→地域情報誌へ変貌、廃刊。

3. 「誌友交際」は何故廃れたか？ —出版史上の意義

- 社会主義との接点 →安寧秩序紊乱、風俗壊乱（自然主義）の取り締まり強化？

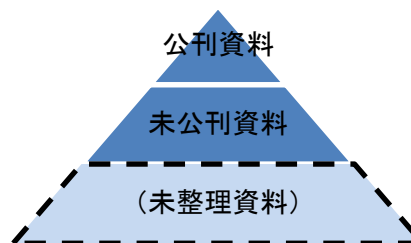
【史料③】木村毅『私の文壇回顧録』（1979年、青蛙房）26頁。

日露戦争後、幸徳秋水が、出獄後の静養かたがた、獄中で社会主義から無政府主義に変わった心の整理のために渡米して、小一年滞在した。（中略）そしてアメリカで出版物を出して、日本内地に革命を宣伝しようという計画を立てたが、誰れに送っていいか皆目わからない。幸いに博文館から出ている「少年世界」とか「文章世界」の投書家は、みな住所を書いているのだ。そこで第一回の発送には一々アメリカから郵便切手を貼って出したが、それでは莫大の費用を要する。そこで第二回目からは、まとめて横浜の同志のもとに送って、そこから日本切手を貼って出したのである。これは費用の節約にはなったが、その代りすぐ横浜警察の探知するところとなり、全部を差し押さえられてつまり日本への定期刊行物宣伝は一時ストップとなった。

- 思想取締に加え流通上の変化もあるのではないか？（出版史からみた意義）
→書店の店頭から同人誌が消える日⇨全国出版流通網の成立（実業之日本『日本少年』の全国普及）と評価できるのか？
- 全国規模、大規模の「誌友会」（『日本少年』の場合） ←大宅壮一の参加
- 1910年の転換…地縁・校友“対面サークル”発行雑誌の復権？

おわりに

- 出版史研究の史料論…図書館資料ありきのデジタル化頼みになっていないか？
- 図書館にも入っていない、入っていても未整理のものをいかに歴史研究に組み込んでいくか。
- 「誌友交際」論の射程…雑誌と文通なら大正・昭和・（平成）にかけても展開したともいえる。 Cf.郷土史家の「誌友交際」（黒岩・2021）
- 明治後期のそれは自前でプラットフォームを作るという点で特殊だったのでは？
→「メディアはメッセージである」とすれば、メディアの変化…意識の変化と関わる



主要参考文献

- 『実業之日本社七十年史』（実業之日本社、1967）
- 林眞「明治後期の地方文藝雑誌」『書誌索引展望』3巻2号（1979）
- 尾崎秀樹、宗武朝子 編『日本の書店百年』（青英舎、1991）
- 清水文吉『本は流れる』（日本エディタースクール出版部、1991）
- 実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』（実業之日本社、1997）
- 柴野京子『書棚と平台』（弘文堂、2009）
- 今田絵里香「少年少女の投書文化のジェンダー比較」小山静子編『男女別学の時代』（柏書房、2015）所収
- 木戸雄一「文章修行の中の「文学」—地方文章回覧誌と「訓詁」志向—」『日本近代文学』101号（2019）所収
- 真辺将行「思想史研究」小林和幸編『明治史研究の最前線』（筑摩書房、2020）所収
- 林正子「占領期岐阜における〈文化主義〉—小木曾旭晃と『地方文化』—」『岐阜大学地域科学部研究報告』第48号（2021）所収
- 黒岩康博「島本一『考古随筆』とその誌友」『史文』第23号（2021）所収

*

- 長尾宗典『〈憧憬〉の明治精神史』（ペリかん社、2016）
- 長尾宗典「読者 「誌友交際」の思想世界」中野目徹編『近代日本の思想をさぐる』（吉川弘文館、2018）
- 長尾宗典「「誌友交際」と地方雑誌」『近代史料研究』18号（2018）
- 長尾宗典「明治後期の地方雑誌メディアにうつる「都市」」『メディア史研究』46号（2019）
- 長尾宗典「思想の流通と出版文化」日本思想史事典編纂委員会編『日本思想史事典』（丸善出版、2020）
- 長尾宗典「名もなき地方雑誌を求めて」『歴史書通信』2020年3月号